

銀河まつり

吉川英治

青空文庫

はしがき

人国記にいわせると、由来、信州人は争気に富むそうである。それは、他国人に比を見ない精悍せいかん熱情な点を称揚したようにも受けとれるが、実は狭量きょうりょうだという意味にもひびく。またこの国が、古来からすぐれた人材を輩出はいしゅつしながら、まだ一人の天下取りも出していない点を諷ふうした言葉と考へてもさしつかえない。

しかしこれは、あながち信濃しなのにばかり限ったことではないように思う。山国の人の共有性ではあるまいか。十数年の間、雪が解

けると始まった川中島の合戦は、越後人と甲州人との喧嘩だったが、両方ともまず山岳割^{かつきよ}扱^{あつか}の武族だった。——けれど争われな
いことには、その際にも、呉越の真ん中に挟まって漁夫の利を占
めるにいい立場にあつた信州は、やはり喧嘩の方が羨^{うらや}ましかつた
とみえて、国人こぞつて両将の幕下に組し、さかんに自分の国の
麦を踏んで戦つてしまった。

——いや、私は、人国記のような肩の凝^こる物を書くつもりでは
ない。

これから持ち出そうというのは、その国の北信濃は戸狩^{とがり}村、俗
に、花火村ともよぶ部落の煙火師生活のなかに起つた恋愛戦で、
煙火師だけに、恋^{こい}仇^{がたき}の首を花火の筒^{つつさき}先^{さき}から打ちあげてしま

つて、同時に、女の生命いのちも自分の生涯も、みんな花火にしてしま
ったという、千曲川ちくまがわの畔ほとりで聞いた、威勢のいい初秋の夜ばなし
なので……。

一

「誰も来やしまいな。——大丈夫だろうな、お芳よし」

「え、大丈夫」

「今の咳せきばらいは」

「延徳村の繭まゆか買いの爺さん」

「もう去いってしまったのか」

「ええ」

去年の落葉が堆肥たいひのように腐っている山の尾根だった。自分の声のひびきに、一種の不気味さを感じるほど、そこは静かである。どこかでぼくぼくと土を掘る音がしていた。檜ひのきの縞しまがすすくと立って、春の空へ暗緑の傘をかさねている。音は、その奥の墓地の中から聞えて来るのだった。鋤すきの音にちがいない。鋤の音がやすむと、木製の鳩笛を吹くような、頼りのない変な鳥が、脅おびかすように、男女ふたりの頭の上で啼いた。

「お芳」

「え」

「大丈夫か」

「誰も来やしませんてば」

お芳は赤い帯おびあげ揚あげをしていた。郷士の娘で、小締めな体つきで、顔だちがよかつた。木立の外に立つて、延徳街道と穂波のほうから戸狩へはいる白い道すじを見張つていた。

墓地といつても、この地方の習慣では、一人一き基主義で、ひとり死ぬと一つ墓石が立つ。だから戸数の割合にそれが多い。山の裾にも、畑の端にも、河原の崖ぶちにも、気楽に墓石がだんらん団らん樂れんしていた。

今、お芳の立たつているうしろの墓地には、まだ雪が深かつた正月ごろ、村のお千代後家が埋いけられた生新しい記憶がある。――
彼女は、半刻ほどそこに立たつている間に、戸狩の若い男を幾人も

情人いろにして肉慾に生涯して土へかえったお千代後家のことなどを、ぼんやりと考えていた。そして可愛らしい口を開あいて欠伸あくびをした。やがて、墓地の中で、若い男が腰をのばした。その足音が近づいて来たので、振りかえると、

「おお、ひどい。もういいぜ」

と男は、耳の穴へはいつた土をほじりながら、抱えて来た壺みたいな物を、お芳の足元へ大事そうに置いた。

「腰が痛てえ」

「いやな臭においがするのね」

「気のせいだよ。死人しびとなんてものは、きれいなものさ。生きてる奴のほうが、よっぼど、穢きたねえ」

「馴れているんでしよう、七さんは」

「親代々の仕事だからな。おら、ちよつと顔を洗つて来よう、むこうの沢で」

「てぬぐい手拭は」

「貸してくんな。へへへへ口紅べにがついているぜ」

七之助は、戸狩村の煙火師だった。こんな山里に代々住んでいても、煙火師渡世の者は、みんな遊び人肌で、いなせで勤がよくつて金きれいで、女に好かれた。

手拭をつかむと、七は、沢の下へ駈け出して、鳥の行ぎようざい水みみにたいに、じゃぶじゃぶと、顔や、手や、足を洗った。

「死人の臭いつてやつは、水で洗うと、妙に生きかえつて来やが

る。馴れていても、やっぱいいもんじゃねえな」

さんじやく

三 尺帯の腰に挟んである草履をおろして、ビタつく足を突っかけた。——そして、流れのそばを去りかけると、ふいに、こらえていた笑いを放つような声が、頭の上から彼を驚かした。

「七之助、忘れものがあるぞ、忘れものが」

「えっ?」

と、蜻蛉とんぼのように首を廻した。

崖の中腹に、灌木の葉がうごいていた。いろの小白い、どこか嫌味っぽい侍の半身が、意地のわるそうな薄笑いをゆがめて、

「鋤すきだよ、七之助。おまえが今、墓場を掘った鋤じやないか。流

れの中へ忘れてゆくと、いつまで、お千代後家の死脂あぶらが里へ流れ

て行く——」

と、葉叢はむらの中から沢の水を指さした。

二

土着の煙火師ばかりが三十戸もあるこの戸狩村には、冬のころから、松代藩まつしろはんのお狼火方のろしかたの藩士が五人ほど出張して秋ぐちまでに作り上げる大仕事を督励とくれいしていた。

今、七之助を皮肉った侍も、その出役組の一名である。

蜂屋慎吾はちやしんごといつて、藩の次席家老のせがれであるが、少し流行

の洋学かぶれがして、変屈者に出来あがってしまった上に、虚弱

で困るといふ親心から、彼の父が、わざわざ藩の狼火方同心にたのんで、この山間僻地へきちの勤務へ、懲戒ちようかいという意味で、役付きを廻してよこしたのだという、厄介な男であつた。

けれど慎吾には、この山村生活も何の意味をなさなかつた。ほかの同僚を頗い使して、相変らず空威張からいばりを通してゐる、当然、村の煙火師たちからも、反感をもつて見られていたが、家老のせがれといふので、誰も、表面だけお坊っちゃんに扱つて、虫を納めてゐる。

で、慎吾は、いよいよいい気になつてゐた。

こんな暢気のんきな出役なら、三年が五年でも続くがなあと思つた。

——そのうちに、他の四名と共に冬から泊つてゐた郷士の家の娘

——お芳に恋をしていた。

今夜は、九の日だった。

月の九日、十九日、二十九日、こう三日の晩には必ず戸狩村の者一同が、郷士のきょうらいしひひょうすけ教来石兵助の家に集まって、仕事上の打合せをする規約になっている。

「よう。御苦労さま」

「お疲れでござんす」

「こんばんは」

「はい、こんばんは」

老人、中老、若い男、夕刻になるとそろそろ兵助の屋敷に寄つて来た。黒い大きな家の中に、この晩だけは、百目蠟燭が二十本

ぐらいとも燈る。お芳も、べつな着物をきて、美しく化粧する。

三

教来石兵助のいまの家は、当主で二十何代目というだけあって、おそろしく古い建物だった。

そもそも、戸狩の百姓たちへ火薬の製法を教えたのが、村上義清に仕えた兵助の祖先ということであって、それが三百年の推移のうちに、雀化すずぬして蛤はまぐの類見たぐいにもれず、あらかた農を捨てて本職の煙火師に化けてしまったというのが伝えられているこの郷土沿革なのである。

花火という怪美な火の魔術が、印度の仏祭から始まって、南欧に、支那に、そして鉄砲渡来と前後してわが日本へ移つてから、諸国の煙火の技術を誇りあう風がさかんになつた。殊に、町人芸術の勃興ぼつこうした徳川期の文化文政以後からその瓦解時代がかいにはいつて刹那せつな的享樂気分が迎えられて、よけいに著しい。

しかし、江戸では続々火災や死傷の惨害を起したりして、一時禁令になつてしまつたが、その反動で、煙火熱は地方的にたかくなり、国際花火の長崎を著名なものとして、九州では赤間あかま、三河では岡崎、尾張の木賊とくさ、越後の三条、信州では戸狩——殊に戸狩花火は松まつしろ代藩主の真田侯さなだが自慢なものであつた。

今でこそ長野県では二尺玉も珍しくはないが、その当時では八

寸玉を限度として、それ以上大きな花火は日本の空で見られなかつた。——で、その八寸玉が初めて出来た時、將軍家の船遊覧をかねて真田侯が戸狩の煙火師を連れて中洲の三みつ又またで打揚げたことがある。

それを見て、笑つた大名がある。三州岡崎城の本多侯で、

「てまえの国元では、あんな花火を、草花火と申して、女子供があげております」

といつた。

戸狩の煙火師は憤いきどおつた。

しかしそれは二十年も前のことなので、こんどの問題が、何もそこに起因しているわけではなからうが、常にふくみ合つて来た

三州と信州とが、いよいよ、ある動機から火蓋を切つて、双方で挑戦状を發した。

煙火試合！

甲の国と乙の国との煙火師が、星夜の空中を競技場として火焰の魔術戦をやりあうという例はこのほかにも珍しくはない。

——その結果であつた。

戸狩全村をあげて、彼らが、冬から必死になつて製作しているのは、三河との競技に、敵を驚きょうとう倒さすべく、寝食を忘れて作つているものだつた。

元よりこのことは、煙火師同士の争いとして、表面は藩の知つたことでないような顔をしていたが、裏面では敵方にも、本多侯

がうしろ楯だてになつていたし、松代藩のほうでもまた、躍起になつて、戸狩の者をべんたつしていた。

その三河信州、両国の煙火試合は、いよいよ今年の秋ときまつた。場所は信州方から出張つて三州長篠の原。——いわゆる煙火陣である。

実際それは、行やる段になると、ほんとの戦いくさのようで、小荷駄、押太鼓など、戦国の習慣どおり正々堂々と陣しを布しいて技術を戦いくさわすものだった。その際、審判者は他国から長老の出場を仰ぐ。若い煙火師はすべて革だすき、長わき差、指揮役の老人や審判者や土地の代官などは、すべて陣羽織じんうぎに小具足こぐそくという身みごしらえであらわれる。

指揮役の命に従わない煙火師は、そこでなら、斬られても仕方がないということになっていた。それ程に、厳肅なものであり、また、それほどに熱中した。

だいぶ余談にわたったが、そんなわけで、戸狩の連中は、

「三河万歳め。戸狩の尺しゃくだま玉をぶツ放されて、腰を抜かすな」と、いう意気込み。

長崎から買入れた西洋薬品や硝石やその他の材料は、藩の手で供給され、五名のお狼のろしかた火方も冬から詰めきりで助力しているわけだった。

で——彼らは、月三回、兵助の屋敷に集合して、作戦や、研究や、用意おさおさ怠りない有様だったが、また仕事の息抜きにな

つて、一つの慰安でもあった。

夕刻からぞろぞろとつながって兵助の屋敷へ来ると、彼らは、里親の所へでも来たように、勝手に風呂へはいつたり、台所を手伝ったり、座敷をこしらえたりして、さて、それからお客様になつて、奥の広間へ年順にかしこまずらりと畏るのである。

上席には、応援役、兼けん目付として藩から来ている五名の侍。

その脇の書院窓の所に、ちよこなんと、主人の兵助。

あとは、左右の障子とふすまに添つて、村の煙火師ばかり、老若およそ七十余名もいようか、黒々と居いな流れたありさま、鎌倉山のごとく綺羅星きらぼしではないが、なかなか物々しい評定ぶりである。

四

兵助はもう六十に近い温容な山侍で、いつも胴服どうふくの背なかを丸くして、坐禅をくむように手を重ねたきりである。

「これで、揃そろうたようでございますか」

やがて、その兵助がいうと、蜂屋慎吾はちやしんごが、前から頭数を読んで、

「いや、まだ一人見えん」

と、自分の明晰めいせきさを誇るように、苦にがつて見せた。

席の中程から、その遅刻の者に代つて、いい訳することばがきこえた。

「へえ、その七之助ならば、実あ、草津にいる伯母の容体が悪い
つていうんで、おととい昨日、山越えで見舞いに行きましたが、どんな
ことをしても、今夜までには帰つて来て、顔を出すといつており
ました」

「分るものか、みもちのよくないあの男のことだ。またごんどう権堂に
でも入り浸びたつておるだろう」

「そんなことはございません。親も女房もないせいか、あいつの
伯母思ひは、誰でも知っておりますんで」

「まあいい、怠け者には、藩としても、それだけの労しか認めな
いまでのことだ」

慎吾は、七之助のいい評判をここで引き出そうとは思わない。

押し伏せるようにいつておいて、

「——今夜見えたら、あの男には、少し拙者からいい渡ししておくことがある。各 には、どしどし用談を進ませて下さい」

と、例のわがままな筆法で、後の進行は、同僚の仕事に転嫁てんかしてしまつた。

「承知しました」

と、相役の四名は、厚ぼつたい帳面を何冊もひろげ出した。――

――硝しょうせき石購入帳、煙火道図式、西洋藥品記録、仕上しあげにゆうそうぼ入倉簿、

職方日誌、賃銀貸出覚え。

銘々めいめい、一冊ずつ、手にわける。

筆とことばと、そろばんと秤はかりの目と、門外漢にはわからない材

料の授受だの、調合の研究だの、三河から帰つて来た密偵の者の報告だの、煙火師対お狼のろしかた火方の専門的な相談などが、およそ一刻あまり何ごとも忘れてガヤガヤとつづいた。——それがすむと、初めて酒が出る順序になつて、話は依然として仕事のことでも、だいぶくつろいだ空氣になり、時々、冗じょうだん戲が交じる、洒落しやれが出る。笑い声が爆発する。

頃をはかつて、お芳が、すがたを見せる。

いつも木綿着物ときまつている彼女も、今夜は、夕顔の花ぐらいにうすく白粉を襟ほに刷はいて、山繭やままゆお織りを濃い紫に染めたよそゆきの小袖を着て下婢かひをさししながら、一同へお酌をして廻つた。

「慎吾様、いかがでございますか」

一巡して、彼の前までかえつて来ると、

「拙者に？」

と、わざとときき返す。

「ええ」

「この間は、妙な所に立っていたな。何をしていたのか、あんな所で」

「……………」父の兵助の耳をおそれるように「あら、そんなこと存じませぬ」

「知らぬことはなからう。七之助と」

彼女は、あわてて隣席となりの者の前へ逃げた。

「黒田様、おひとつ」

そして、席順に、次へすべに、

「長沼様、林様、いかがでございますか」

うしろのほうで、慎吾がまだ何かいうのを、きこえぬ振りをして、いそいで、父の兵助の前まで来て、訴えるように、

「お父さま、お酌を」

と、眼で甘えた。

「うむ」

と兵助は膝に組んでいた指を解いて、むっそりと娘の酌をうけながら、

「お芳、あとでわしの部屋までちよつと来てくれい」

「はい」

彼女は、父の眼が自分の上に注がれているのを感じた。抑えようと努めた動悸どうきがかえって銚子を持つ指先に出てカチカチと父の杯を鳴らした。

「お、来たようだぜ」

「七か。おう、七之助だ」

その時、末席の方がガヤガヤし出したので、思わず眼を向けると、今やつと顔を出したらしい七之助の姿が、煙草たばこのけむりに霞かすんで見えた。

五

酒がはいつてみると、煙火師渡世の者は、みんなズバ抜けた道楽者ぞろいである。飲むことも飲むが、話は面白い。膝のくずせない五人の侍は、だんだん存在が薄くなった。

折をはかつて、父の兵助が眼で招いたので、お芳はおずおずと奥へついて行つた。うす暗い書齋だつた。

——そこへ、お坐り。

ここで見れば、父の眼は急にやさしい。けれど、孤独の涙と、峻しゅんげん 巖いげんをもつた優し味である。

兵助の声はかすれていた。

「おまえな……」

「はい」

「まさか、七之助と、ひよんな仲になつておるんじやあるまいな」

「ええ」

「ええじや分らん」

「人の蔭口でございますよ」

「たしかに蔭口かな」

「お父様の眼をしのんで、そんなことはいたしません。ただ」

「ただ？」

「……いろんな相談をうけるものですから」

「どんな相談を」

「こんどの仕事のこと、七之助さんは、藩士の方よりも、戸狩

の誰よりも、いちばん死身にかかつて、苦しそうでございます」

「それや、苦しんでおるじやろう。ふだんは博奕ばくちと酒より能のな

いやつじや。それが仲間内から、若いのに名人だとか、上手だと

か、煽おだてられておるだけに、こんどのような場合には、いやでも、

人ひと優すぐれた腕をみせなければ、この村にもいたたまれまい。――

で、何をもくろんでいる様子か」

「今までにない尺二寸の大玉へ、色も、今までに誰も出したことのない、赤と紫の火光ひを仕込んで、三河の者を、驚かしてやるんだといって、それはもう、お気の毒なくらい懸命になっております」

「赤の火色を出すって？」

「……ですから私も、つい、力づけて上げたいと思つて」

「その先のことは、いわんでもよい。分つておる。——おまえ、七之助に頼まれて、わしの書庫から、門外不出の書物を幾冊持ち出したな。そして、彼に貸してやつたな」

「……………」

お芳はそのまま畳の中へ沈み込んでしまいそんな顔をした。

「あんな無学な男に、わしの書物を見せたとして、なんになるか」

「……………」

「もう貸し与えたものはしかたがない。だが、あれは大事な書物だ。教来石流の煙火の秘本だから。小布施おぶせの高井鴻こうげん山だの、松代の佐久間象山しょうざんだの、幾たびもせがんで来たが一度も見せ

やせん。——それとなく、早く取り戻せよ、よいか」

「……すみませんでした」

「七は、短気な男だから、わしがといわぬほうがいいぞ。おまえが気がついたようにな……」

「はい」

「分ったか」

「わかりました」

「それだけのことだな、おまえと、七との間は」

「え」

「じゃ、ついでにいうとくが、もうあの男に近づいてはならん。

悪い男ではないが、おまえのためにならん」

「お父様、なんでもないのでございますよ！」

お芳は、甘える時のような、やや語尾のたかぶった声で、

「——誰がそんなことをいうのでございましょう」

「だから、つつしまねばいかん。おまえも、そろそろ嫁とつがなけれ

ばならぬ身だ。実をいうと、話もだいぶ進んぞる。この間、沓野くつの

村のお帰りに立ち寄られた象山先生——あの松代まつしろの佐久間修理しゆり

殿じゃ、そのお方が、媒人なこうどしてとらせるともいうておられる。

先様は、次席家老の御子息だぞ、決しておまえにとって不幸な話

じゃないと思う」

「でも……お父様」

「わ、わしが、どんなにおまえのことだけを、この世の気がかり

にしているか」

「……………」

「分るか」

「……………」

「分つてくれい」

「……………」

おごそ
 厳かにも苦甘い沈黙だった。

兵助はぼろぼろ泣いた。お芳は、乳をむしりたいほど胸がいつぱいになつていながら、老父の愚に返つた嘆きを見ると、かえつて、涙が出なかつた。

そしてただ、四、五日前に、この家へ立ち寄つてしばらく父と

話し込んで行つた、松代藩の三村利用係という役目をしている西洋臭い儒者を思いうかべていた。

その儒者は、馬みたいな長い顔をしていた。

沓野くつのの百姓に葡萄酒ぶどうしゆを造らせてみたり、温泉場の排泄物はいせつぶつか

ら、なんとかいう西洋薬をとる試験をしてみたり、また、この近郷の山に檜の苗を植えるといつて、あまり百姓を加役に引っぱり出したため、佐久間騒動などという一揆いっきをひき起したりした象山という学者は、あの人だったかなどと、彼女はそんなことを考えたりしていた。

すると、その時、

「喧嘩はよせ」

「喧嘩じゃない！」

「無礼だ！」

「無礼じゃない」

と、寄合のある座敷のほうで、怒号と物音と、何やら、すさまじい空気が、屋内を震撼しんかんし出した。

六

兵助はすぐに出て行った。

お芳も、何事かと、あとについて、廊下の隅に立ちすくんだ。

あらかたの者は、話もすみ、酒にもたんのうして帰った後であ

る。

——見ると、蜂屋慎吾と七之助が、お互いに蒼白になって、何か、口論しているところだった。

それが今にも、腕力沙汰になりかねない息巻きなので、残っていた少数の村の者と、四名の藩士が、双方のそばに立って、

「まあ、およしなさい」

「七！ やめろ」

と、押しわけていた。

「不埒ふらちなやつだ、武士に向って」

と、慎吾はなかなか鎮しずまらない。

七之助も、一本気なたちで、退ひく気色もなく、

「仕事の上には、武士も百姓もあつたもんか。いい仕事さえすれば、やいんだ！」

と、叩き^{たた}つけるようにいった。

「生意気を申すな、生意気を。学問は進んでおるぞ、近ごろの砲術の進歩をみる、蒸汽船の発達をみる。——それを花火だから、古い製法でいいということはない。大砲にせよ、花火にせよ、同じ火術だ」

「よしてくれ、そんな講釈は、戸狩の者あ三ツ児でも知っていらあ」

「知っているなら、なぜ藩から渡してある硝石や薬品を使わんだ。わざわざ長崎から高価な代金をもって取り寄せた材料をつか

わずに、むさい墓場などを掘り返して」

「な、なにをいってやがんでい」

「墓場をあばいて、死人の腐肉から、何をとるつもりなのだ。あきれた愚かな者だ！ 貴様は頭が古い！」

「あたりめえだ。おらあ洋学者じゃねえ、煙火師だ」

「三河へ探りにいった者にきいてみい。煙火師でも三州の者は、藩で指導するまでもなく、進んで薬品の調合も洋法を用い、硝石などはみなイギリスものを買い込んでいるというたぞ」

「向うは向う。こつちはこつちだ。なにも真似をすることあねえ。第一おらあ毛唐けとうのものは嫌きらえだ。おれの仕事は日本流で行くんだ」

「こいつ、あきれ返った無智なやつだ。じゃどうしても、藩の指

導にも従わず、また仕事も洋法によらんといいのだな」

「ほかの者がやるだろう。あつしや御免だ」

「松代藩には、西洋火術の大家、佐久間先生がおられるのだぞ」

「戸狩村にや、七がいるぜ」

「な、なまいきな広言を！　こんな山村に伝わっている法は、もう時勢遅れだわえ」

「じゃ、きこう」

「何だ？」

「洋法でやれや、赤でも出せるだろうか」

「火色のことか」

「そうよ！」

「ば、ばかめ。気が狂っているな貴様は。どこの国の煙火に赤色があるか！ うすい樺色かばは出る。だが、真紅しんくは出せない！ それはあたりまえのことだ」

「ところが、おれの腕からは赤が出せる。しかも、血のように真っ赤なんだぜ！ 紫も出るんだ！ ふしぎじゃねえか、洋学なんて、甘えもんさ」

と、七は優越を信じるようにセセラ笑った。

ここで説明せねば分らぬが、七がたんかを吐いたはように、昔の花火には、赤はなかった。うすい樺色に似た光は出たが、現今のような真っ赤な光彩は夢にも見られなかった。日本の花火に、鮮麗な赤色光が一般に見られ出したのは、明治八年に洋行して大おおや

火傷けどを負つて帰朝した兩國の鍵屋かぎや弥兵衛が齎もたらした研究の後である。——それまではなかつた。七の放言が、狂人のたわ言と聞かれても、そのころでは、無理がなかつた。

慎吾は、睨みつけて——

「じゃ貴様は、きつと赤が出せるといふのだな」と、つよく念を押した。

「おお、おらあ出して見せる。だから、気の毒だがおれの仕事にや、一切かまわねえでくれ」

兵助老人は、あまり激しいので、手を出しかねていたが、とうとう横から口を出した。

「これ、七！ 何というこつた。次席家老の御子息に対して、そ

の口はなんだ！」

「仕事のことです！　へい、仕事の上なら、あつしや、誰にだつて、どんなことだつて、いわずにやおきません」

「仕事に熱いのはよいが、礼儀も、理非も滅茶滅茶になつては困る。——慎吾殿、勘弁してやって下さい。悪気のない奴じやが、こういう持前なので」

老人のことばには、二人ともやわらいだ。とすぐ、七の眼がチラとお芳を見つけた。——その眼を、慎吾も感じて、振りかえつたと思うと、彼は、四名の同僚に手や腰をすくわれながら立ち上がつて、

「無学のやつは度し難いものだ。しかし、このままでは、藩の御

威光にもかかわる。——いずれ貴様の仕事場へ参つて、今夜の梟けりをつけるから左様心得ろ！」

「お。仕事の意地なら、果し合いでもしてやるぜ」

捨すて科ぜりふ白を投げ返すと、七は、さつさと自分の家へ歸つてしまつた。

七

「お芳どの、どこへ」

すこし汗ばむような陽気だった。杏あんずの花の香うが熟うれている。

お芳は、足をとめた。森の中からこつちを向いて歩いてくる慎

吾の笑い顔を見つけた。そして、彼の顔や肩へ、木の間からチラチラと射す^さいっぱいな日光の鬩^{えくぼ}にうっとりとした。

「七の家へ行くのだろう」

「ま」

「驚いたか。余りよく知っているのだ」

——帰ろうかしら。

彼女は困った顔をした。

「何もかも兵助殿から聞いている。書物を取り戻しに行くのであろう」

「ええ」

「ああいう乱暴者のことだから、またどんな無態^{むたい}をいわぬとも限

らぬ。拙者がついて行つてやろう」

「そんな心配はございません」

「分るものか。第一、そなたがあんな書物を持ち出したのがよろしくない。この間の広言も、墓あばきも、みな種はその書物から始まったのだろう」

いよいよ困つた顔をして、お芳は、自分の足を見ながら歩いて
いた。

「墓場の屍肉しにくから、燐りんぐらいのものはとれるか知らないか、赤しやっ
光こうを出す薬液などがとれるものか。ばかばかしい」

「ほんとに、駄目でございますようか」

「そなたも本気になって、その腐い物を掘る張り番をしていまし

たな」

「でも、父の秘本に、赤い光を出す交ぜ薬まぐすりのことが書いてあつて、それには、墓場にあるある物から一つの薬をとるのだといつていました」

「そんなことは、アイヌ族か熊襲くまそでも考えたことだろう。今日では、火術も進んでいます。高島秋帆しゅうはん、江川太郎左衛門、また同藩の佐久間先生、みな洋学に倣ならつておる。たとえば、吾々が戦時につかう狼火のろしというものでも、無智な戦国時代には、狼の糞ふんを干し蓄えておいて燃したものです。狼糞ろうふんの煙はふしぎに高く真っ直ぐに揚がるから。——で、狼の火と書いて、のろしと読ませるのもそのわけですが、今ではあて字にもなりません。長崎から

はいる蘭らんやく薬を二、三種あわせると無音狼火のろしでも音のするのでも自由に簡単に造られる。また、大体がです、美感に衝うたれようとして人の観賞する花火を造るのに、なんのために、なんに飢えて、墓地の醜物あさまを漁る必要があるだろうか」

「そうおっしゃれば、まったくでございますね」

お芳は、今まで信じていた七の腕が、この間の晩の口論を聞いてから、慎吾の知識の尺度に比較されて、急にはかないものに思えて来た。

「時勢がちがってくると、大きな声ではいわれぬが、幕府でさえ、ぐらついて来ているじゃありませんか。思想、学問、工芸、なんでも古い頭脳あたまじゃ追いつかない。七之助みたいなやつは、いくら

腕がよくても、洋学が進めば、無智な土民というだけで、あんな仕事は五年も先には役に立たなくなる」

「そうでしようか」

「そうですね。だが、そこへ行くと、兵助殿は偉い。さすがに頑がんめい迷めいでない。世の中の行くところを知っている」

「いえ、あれで、そうでもないんです」

「なに、考えていますよ。その証拠には、拙者の説などもよくうけられるし、またそなたの良人となる人物などについても……」
と、彼女の横顔をわざと見つめた。

「あ……もうそこが七之助さんの家ですが」

「かまわないからおはいんなさい」

「でも」

「拙者は外に隠れていますよ。万一きやつが返さぬの何のと苦情をいったら承知しはせん」

「そんな憂いはありませんが、あの、ほかに少し話がありますから」

「じゃ、拙者が聞いていては、困ることと見えるな」

「追い返すわけじゃございませんけれど」

「帰ってくれというのだろう。よろしい、遠慮して、拙者は元の道へ引つ返すこととしよう。その代りに、約束して下さらぬか」

「何をですか」

「実はこの慎吾も、そなたに一度話したいことがある。だがいつ

も同僚どものいる屋敷では都合が悪いから、旧お陣屋跡にある家で一度会つてくれませんか」

「あそこは昔代官のお別荘で、今では、誰も住んでおりません」

「人が住んでいちゃ困るんだ。空屋敷あきやしきだから落着けるので」

「そんなことをすれば、村の人が、何と行って、取沙汰するか知れませぬ」

「分つてもかまわんでしよう。いずれ分ることになるそなたと拙者の間だもの」

肩に手をのせて、耳へ触れるようにせせこや囁いた慎吾は、お芳が無反撥で俯向うつむいているのを、征服的に覗いて、

「誓つたぞ。——じゃ今日は、無理をいわずに引つ返すとするか

らな」

と、お芳をそこに残して、すたすたと元の道へ帰って行つたが、少し先の雑木林をぐるりと廻ると畑の地境土手の蔭を歩いて、また元の七の家の横手へ戻つて来た。

お芳の姿は、もう外には見えない。

代赭^{たいしやいろ}色の壁土と皮つきの丸太とで屋根低く建てられてあるそ

この家は、住居というよりは仕事小屋であつた。黄色い 鼬^{いたちぐさ}草

の花が咲きみだれている垣根をふみ跨^{また}ぐと、彼の足元から鶏の親と雛^{ひな}が両方へわかれて駈けた。

「? ……」

そこへ、慎吾はしやがみ込んだのである。

八

「仕事にかかったら、このごろは、誰が来ても小屋にや入れねえんだ」

七之助はうしろ向きになったまま、火薬にあわせるほおのきずみ木炭を砥とでおろしていた。

「くさいこと、ここへ入ると」

「あたりまえさ、嫌なら、帰ってくんな」

「まー」

と、睨んだが、坐り場所もないので、お芳は立っていた。

仕事にかかると夢中になる七之助は、彼女を振り向いても見なかった。そばには、正覚坊しょうがくぼうの卵たまごみたいなの、三寸玉から五寸玉ぐらいまでの花火の外殻からが、まだ雁皮貼がんぴばりの生乾なまびになつて幾つも蔭干しになつてゐるし、膠にかわを溶いた摺鉢すりばちだの、得体えたいの知れない液体を入れた壺かじだの、藁灰わらばいを入れた桶かじだの、そのほか秤はかりとか、刃物とか、硫黄いおうの塊片かけらとか、なにしろ眼にあまるほど散らかつてゐる。

いつもは、そんなにも感じなかつたが、慎吾の話しんごを聞いてから、彼女の眼にはそれらの物が、みんな浅ましい無智しゆの蒐しゆう集しゆうに見える。

小屋の隅にはまた、蓆むしろをしいて、穢きたない土が盛り上げてあつた。

その土には、茶褐色の羽虫だの白い微生物だの、ぞろぞろとうごめいていた。無智の虫！ 彼女は眉をひそめた。

「どうするの、こんなに、家の中に穢きたない溝どぶつち土を運びこんで」

「硝しょうせき石をとるのよ」

「土から火薬を」

「ふしぎなことはねえや、昔やみんな、そんなものから弾薬をとって戦いくさをやったんだ」

「でも、硝石ならば、何もそんな手数をかけないでも、売っているし、仲間の物を貰ってもいいじゃないの」

「うんにゃ」

と、七は、頑固がんこに首を振って、

「こんどの仕事にや、何もかも、一切長崎仕込みのたねは使わねえつもりなんだ。意地だもの！」

「強情ツ張りだこと」

「そうよ、煙火師なんてものは、煙草たばこの火玉でも一つ転がり方が悪ければ、骨も肉もどこへ行つちまうか分らねえ渡世だ。寝る目も寝ねえで、半年も一年も、頭を病やんでこしらえた品物にしろ、ドウンと一つ音がして、あつと思や、消えつちまう仕事をしていゝるんじゃねえか。意地でもなけれや、出来るもんか！」

戸狩に生れているお芳である。その気もちはよく分っていた。七との仲も、お互いに、ぞんざい口がふつうになるほど深かった。恋も生き方も、花火のように刹那せつな刹那で行く男の気もちが、

お芳を強くつかんで来た。黴すすくなくもきようまでは、この小屋の異臭や汚さが胸をむかつかせたことのないまでに――。

元から刹那主義な恋だったから、当然行き詰りが来たのかも知れない。だが、彼女はそういう理由をつかむ気もなく、ただぼんやりと新しい慎吾のすがたを、知識を、地位を、描いていた。

「ところで、お芳」

「え」

ハツとして――「何ですか」

「何しに来たんだい、今日は」

「あ、忘れていた。あの……いつか持って来て貸して上げたお父様の書物ほんを、いちど戻して貰わないと、私が困ることがあるんで

すよ」

「どうして」

「松代まつしろの佐久間先生へ、どうしても、貸さなければならぬといつて、お父様が出しておけと私にいうのでね」

「嘘だろう。ははあ分つた。おめえはあの次席家老のせがれに突つつかれて、書物あいつを取り上げれや、おれがこんどの仕事に腰をつくだらうと、相談の上で、取りに来たんだな」

「ま、邪推じゃすいぶかい」

「そうに違えねえ。おらあ何でも知っているんだ。ヘン、こう見えても七之助は地獄耳だよ」

「おまえは、きようはどうかしているんでしょう。また機嫌のよ

い時に話しますから、書物ほんだけ戻して貰いますよ」

雑多な薬液の瓶びんが載っている棚の隅に、見覚えのある父の古書が重ねてあるので、取って帰ろうとすると、

「待てッ」

と七は、いきなり立つて、

「うぬ、心變りをしやがったな」

足を上げるがはやいか、お芳の細腰を狙ねらつて、土間の下へ蹴落した。

息を引きとるような鶏の声がして、けたたましい羽搏はばきが裏口を掠かすめたと思うと、そこから、口を結んだ慎吾の血相が、おそろしい勢いで屋内へ飛び込んで来た。

「あつ」

七は、お芳の上へ重なつて倒れた。起^たとうとすると、またすぐに蹴とばされた。四度ほど鞠^{まり}のように蹴^け転^{ころ}がされて、太陽の直射を浴びると同時に、彼は、草ぼこりと一緒に、猛然と大地に両足を踏^ふん^ばつた。

「慎吾だな、てめえは」

「慎吾だ」

「なんでこのおれを蹴^けつた」

「なんで、お芳どのを蹴^けつた」

蒼白にひつつれた顔と、迫力にふるえる拳^{こぶし}が、鬪^こ鷄^{けい}のように睨^ねめ寄^よつて、陰惨な呼吸を数え合つた。

「蹴ろうと撲ろうと、よけいなおせっかいだ。おれの女をおれが蹴るにふしぎはねえ」

「おれの女？」

「うム、立派にいおう、お芳はおれの女だ」

七は憚はばからなかつた。

眉をビリビリさせていた慎吾は、相手が敢然とさげんだ事實に、ほとんど血の気を失いかけながら、

「これやおかしい、兵助殿が戸狩の七に娘をやつたという話は聞いたことがない」

「何が何でも、お芳は、おれの女にちげえねえんだ」

「ばかを申せ。お芳どのは、父親の許しもあり、また、本人もか

たく拙者と誓っておるのだ」

「ふうむ、それで読めた。何かにつけて、てめえがおれの仕事に茶々を入れるなあ、そんな恋の怨みだったのか。可哀そうな程、ケチな野郎だ」

「だまれ、お上の役目に私怨をふくむか。——おお、いつぞや貴様は、仕事の上のことならば、果し合いもいとわんといったな」
「いったがどうした」

「藩の目付として参っているこのほうのいい条に従わぬ以上は、お上に対しても、役目の身がすまん。と行って、貴様も、アアまで我を突つ張った手前、まさか今さら後悔したともいえまい。望みどおり果し合つて、解決してやるから得物を持て」

と、人を罵るののしの快感が、実はそこまでの腹はない慎吾に、思わず毅然きぜんといひ放させてしまった。

「よし、待っている」

七には、否やがない。

脇差をとるために、彼は、からだを弾はずませて、精悍せいかんに家の中へ飛びこんだ。

その間に、慎吾は、下げ緒を解いて袖をからげた。うろたえているお芳へ、頤あごを横に振って、幾たびも刀の柄つかい糸をしめしたが、だんだん胸の鼓動を感じていた。

だいぶ間があつた。

彼は、二つ三つ、腕の空振りを試みた。なお余裕がありそうな

ので、五本の指を一本一本節を折って待ち構えた。それでもなかなか見えないので、土俵の砂をふむように足馴らしをはじめた。しかし、七はまだ出て来ない。支度にしては長すぎるし、小屋の中はいやに静かだ。

九

「どうした。七！」

慎吾は、呶鳴ってみたが、返辞がないので、さては逃げたな、と土間の中へ駈けこんで見た。

と！ 案外である。

相手は屋内に落着きこんでいた。慎吾はかえってギクツとしながら、覗くように様子を窺うと、彼は、さつきおろしたほおの木炭へ硫黄いおうと青い細末をあわせて、それを乳鉢にゆうばちでゴリゴリ磨すっていた。

慎吾は、上がりかまち框へ片足をかけて、

「七！ ひるんだな」

「ばかをいやがれ」

と、七は、磨りつぶした粉を、百匁めばかり秤にかけて眼を寄せながら、

「笑わせるな、誰がひるむ」

「出るツ、なぜ外へ出て来ないか」

「おらあ止めだ」

「あやまったか、たわけ者め！ 恐れ入ったといえ」

「ふ、ふ、冗じょうだん戯ごをいいつこなしき」

「うぬ、まだ広言を」

「何が広言だ、勝手な歯ぎしりを鳴らしていやがると、ここから火薬玉をたたきつけるぞ」

慎吾は思わずかまち框かまちの片足をひっ込めて――

「では得物を取って、尋常おもてに戸外へ出る。果し合いというのは、貴様から望んだことだぞ」

「止めたつていうことよ、くどいな。おらあ、考えてみれや、煙火師だ。斬っても、斬られても、刀でやり合うなあ面白くねえ」

「ば、ばかめツ、刀で果し合いをせずは何でする！」

「本職で行こうじゃねえか、本職でよ。——おめえも次席家老のせがれだつていうが、役名は火術自慢の松代藩でお狼火のろし方つていうんだらう。おれも火いじり商売だ。同じ果し合いをやるなら花火でやろう」

「そんな勝負は武士の慣ならいがない。拙者は武士だ、刀にかけて解決する」

「おれは職人だ。腕で来い。やい、てめえは常に何といつている。ふた口めにや洋学をふり廻しやがって、おれたちのことを頭脳あたまが古いの、無智だの、時勢遅れだのとほざくじゃねえか。刀と刀でチャンチャンと叩き合うのもあんまり新しいともいえねえぜ。ひ

とつ煙火師と侍と、どつちの頭脳あたまがいいか、腕力うででなく技術わざで勝負をしようつていうんだ。——それともてめえのは口先学問で、実際になつちやあ能なしだというならば、相手にとつて不足だから土間に手をついて謝つてしまえ、お螻蛄けらだと思つて勘弁してやるから」

いつの間にか、土間の外には、戸狩の若者と四名の藩士たちが、がやがやと別になつて揉み合つていた。中へはいつて慎吾の助力をしようと思巻く侍のほうを、村の若者たちが手をひろげて、断じて拒こぼんでいるのだった。

慎吾はのつぴきならなくなつた。戸狩の者や同僚どもの手前——またお芳のてまえにも。

「よし！ どういう勝負でもしてやろう。してその約束は」

「みんなに決めて貰おうじゃねえか」

「ウム、立会い勝負か」

「そうだ。おい、一同、はいつてくれ。お芳も逃がさねえように連れて来てくれ」

外で揉み合っていた連中は一時に小屋の中へ雪崩れなだこんだ。お芳も逃げるに逃げられないで無慙むざんな羞恥はじを大勢のうしろに隠していた。

しかし、村の習性か、危険物をあつかう職業的反映か、きわめて男女間の風紀が放ほう縦しゅうで、性生活の自由なこの村の者は、眼のまえにひき起された三角葛藤をながめても、そう驚異とも感じ

ない様子であつた。

尤も、このことは、前から口には出さないが、皆うすうす知つていたので、いずれ一度はひと騒ぎを遁のがれまいという予期もあつたに違いない。

ただ氣の毒なのは兵助老人で、お芳の性的行状をまだ少しも知らずにいる。その小締めな体つきをながめて、いつまでもわが娘こは子供だと考えていた。ところが事實は、彼女には七之助の前にも、七之助さえ知らない肉の知己が四、五名もあつたのである。

けれどそれを強しいて兵助に知らせようとするほど無慙な者もいなかった。お芳も、初めは消え入りたそうであつたが、男と男が、ぎようそう形相こわを硬こわばらして、またそれを戸狩の者や、四人の藩士が息

ぐるしく取り囲んで、いよいよ、果し合いの凝議ぎようぎをしはじめた時分になると、真つ蒼な顔を上げて、自分の運命についてもその人々の話に、無関心ではいられなくなつて来た。

で、果し合いの約束はほぼ決定した。

後日になつて異議のないように、立会人が箇条書にして双方へ手渡した。そのうち重点を拾つて誌しるすと次のような事々である。

まず、各、十分自信のある花火をこれから百日の間に製作すること。

製作材料ならびに薬品等の選択は各自の自由。また手助けとして二名までの下職は使つてもさしつかえない。

寸法は手頃として八寸玉。

検証はここにいる一同。

打揚げ勝負の場合は、筒ごしらえ、口火落し、すべて当人以外の助太刀はゆるさない。

場所は善光寺より四里、川中島から東南へのぼった千曲川ちくまがわの河畔かはん。

日はおよそ七月上旬。三州長篠ながしのの煙火陣へ押出す前に決行する。

約束はざつと以上のような条件であるが、さて、勝ったほうはどうするか？ 負けたほうはどうされるか？ 刀と刀の果し合いでない以上、生命いのちには別条がないわけであるから、その結果にも当然約束を附しておかなければならない。

しかしその場合の要求点は、二人とも一致していたので厄介はない。簡単明瞭である。——負けたほうはどんな恥かしめも甘んじて受けること。つまり制裁に服す！ である。

それともう一つ、優越者は、お芳を自己のものにする！ 敗れたものは恋の資格を失うことであつた。何のことはない、お芳にも意思はあるだろうに、立会人の凝議ぎようぎは、彼女の恋までも、八寸玉の中に入れてしまった。

十

慎吾は早速、製作にとりかかった。彼とてもまんざら自信がな

いわけではない。

戸狩の仲間うちでも、七之助に反感をもつていそうな男を二名、助手として雇つて、その男の小屋と設備を、仕事場にあててかかつた。

「どんな様子だ？ 七のほうは」

同僚が来ると、そればかり探りたがつた。

「空家みたいだな、七の家は」

「ふーん、逃げたんじやないか」

「なに、中で音はしている」

慎吾は常に何かしら彼の迫力に押されていた。藩へ手紙を出して、殊に精製した強力な硝石や薬料をぜいたくに取りよせた。そ

の点では、七之助が相変らず伝統を固持していわゆるくでんしき口伝式な、妙なものばかりから材料をとっているというやり方に対して、十分な優越をもてた。

村は夏めいて来た。この山国に新緑を見るときも五月の中旬なかばであつた。

二人の手伝いが休んだので、慎吾も、仕事小屋にぼんやりしていたが、一昨日おととい、窓から投げこんで行ったお芳の手紙を出して、読み直していた。

彼女の手紙は、その前の手紙よりも、自分への好意をだんだん明らかにしていると慎吾は思った。ふたりの男の智能や身分を比較してみれば、どんな無考えでも、女が自分のほうへ歩み寄りた

がつているのは当然だと考えた。

「果し合いをする前に、もうお芳はこっちのものじゃないか」
ほくそ笑まれると同時に、何だか、禁断の実みを盗んでいる気もする。

それに近ごろ、他の同僚たちが、暗にお芳との恋を諫いさめだてする口ぶりなのが、よけいに慎吾を依怙えこじ地にさせた。そういう捻ねじけかたは彼の性格から何事にも首を延ばすことであるが、こんどのお芳のことには、非常に強い。

「会いたくなつたなあ」

ぶらりと外へ出た。珍しく着流しに草履わらじばきで、日蔭を拾った。教来石兵助の家を訪ねてみると、お芳はいなかった。湯田中ま

で行ったからまだ帰るまいという。兵助老人を相手にしばらく世間ばなれのした話をしていたが、こんどのことは絶対に聞かさぬことにしてあるので、長居もできない。自分だけ泊り場所を移したことも、この老人には藩用の都合でといいつくろつてあるくらいだった。

——その帰り途である。

わざと遠廻りをして、村から離れた旧陣屋跡まで来ると、これも藩の佐久間象山が移植させたのだという林檎畑りんごばたけがある。その低い枝の下を潜って、ひとりの男が、向うへ行く。

見たような男だが——

慎吾は、先へ廻って、旧陣屋の土塀の蔭にかくれていた。塀の

崩れ目は雑草の中に沈んで、また向うへ続いている。百年以上もこのままになっているという建物の真つ黒な棟がその間から見えた。

「おや？」

慎吾は目をみはった。

今その中へ、あたりを見ながら、犬のように這いこんだ男は、七之助にちがいない。七！と思うと、彼は頭のしんを嫉妬しつとの血が熱いようにのぼるのが分った。

いつかお芳と約束したことがある。彼はそれを忘れてはいないが、あの時の騒ぎからつい機会を失っていたのだ。

旧陣屋跡の古家なら、人目にもかからずゆつくり会えるからそ

ここで一度話そうといったあの約束である。——お芳は、自分が教えた場所で、いつのまにか、七と密会しているんじゃないだろうか。「それでだ。近ごろ同僚のやつが、いやに奥歯に物の挟はさまったように諫いさめるのは！」

むらツと燃えながら、十歩ばかり駈け出して、土塀の崩れ目から中を覗きこんだ。ぽきりつと自分の手に大きな響きがした。つかんでいた木の枝が折れて来たのである。

その音に気がついたように、今、空屋敷の雨戸の前にたたずんだ七の顔が、チラとこつちを振り向いた。慎吾はあわてて後ろへ身を退ひいた。七も意外な顔をして、急にからだを曲げると、横へ反それて、向う側の土塀を越えて戸狩のほうへ帰ってしまった。

だが——七が帰ったのは、慎吾には見えなかった。疑心と嫉妬が怏々おうおうと足にからみついて、そこを去り得ないのである。

「あら、慎吾様じゃありませんか」

不意だった。

びっくりして振りかえると、林檎畑の細道から女の姿が歩いてくる。林檎の木の小枝の間からお芳のひとみが見えて来た。

髪の毛から褻つまさき先までを、調べるような目でながめて、

「どこへ行って来たのか」

「湯田中まで。——あなたは」

「そなたを探しておったんだ。湯田中じゃあるまい」

「じゃどこです」

「この古家の中にいたんだらう。七のやつと」

「ま！……」と呆れ顔あきに笑いかけたが、男の嫉妬の色に気がついて、少し胸の前を離れると、慎吾の腕が、ふいに、抱き倒すように、彼女のからだを巻いた。

「昼間から七と会っていたんだらう。人の住まない家だ。足痕を見ればわかる。こつちへこい」

氣狂いじみた力で、抱きしめたまま、ぐいぐいと空屋敷のほうへひき摺って行った。お芳ひたいの額は汗ばんでいた。苦しかった。けれど彼女は悲鳴などはあげなかった。

……………

それから後、ふたりは度々、草いきれのこもった古家の雨戸を

はずして、こっそりと黴かびの咲いている闇の中を楽しんだ、昼間会
う時もあった、夜会う時もあった。

十一

気色のわるい面つらを見たので、七は何もしないで、陣屋跡の古家
から帰って来てしまったが、そこへとりに行った物は、まだしば
らく足りているので二十日ほど行かずにいた。

その間に、彼は、自分の心魂をつめこんだに等しい八寸玉の製
作を終った。

八寸玉というとかかなり大きな物である。玉の外殻はうすい雁が皮ん

紙びしで一枚一枚貼はつて、金属のようになるまで根仕事で固めたものである。中は、秘中の秘だった。二つに割つてみれば、ちようど人間の脳を解剖かいぼうしてみたと同じに、大脳や小脳や血漿けっしょうや細胞や、微妙な物体の機構がくるのであるのだった。誰がこれを生き物でないといえるだろうか。七は、膝にのせてみて、つくづくとそう思った。

この中には、おれの骨もけずり込まれている。血もはいつている、癩かんしやく癩かんしやくすじも涙も詰まっている、いや恋さえはいつているんだ。——古屋敷の床下の土からとつた物や死んだお千代後家の脂あぶらまでも。

——無理やねえ、雨気をもつた暗い晩、こんなのがあがるとひ

ゆツと泣いて、青い火が降るとぞつとするようなことがあらあ。
やっぱりこいつあ化物の類だろうよ。

七は、自分の作った八寸玉の、その重量にさえ、一種の気味わるさを感じるのだった。

彼にいわせると、花火は、生きてる化け物だという。あの怪奇な、あの蒼白い妖焰ようえんの幻滅する間際に、自分の魂というものを考えると、知らない女とでも死にたくなるという。——そうかと思つと、こつちの胸に火の移る恋でもある時は、どーんとひらいた柳の中へ、ふところの金でも何でも、追っかけに抛り上げたいような狂躁にも唆そそられる。だが、両国などの熱鬧ねつとうした花火の晩のあと、暗い霧が落ちて、しいんと都会が冷たくなる時の陰気さ

はなんともいえない。やっぱり花火は生き物で、妖怪さ。

七は今も、そんなことを考えながら、巨大な妖怪の玉を、押入れの奥にしまいこんだ。

「さ。いつでも来い」

自分の苦心にかえりみて、彼は恥ずるところがない。

十二

もしこの玉から彼が苦心の しゃっこう赤光が放てなかつたら、ほかの火焰がどうよく出ても、ひらいた相が すがた上品でも、音響が何里四方をゆるがしても、また人工の星が宇宙の星を連れて地へ下がって

来ても、立会人は、こつちへ軍配を揚げにくいだろう。

しかし、七には、自信があつた。

彼は、その日から涼しい顔をして、別の仕事にかかつた。

そのほうは、気楽な雑物で、問屋へ持って行って金に代えるだけの仕事である。その合間には、三河の煙火陣に持ち出すひっせい畢生の大作尺二玉をぼつぼつと進めている。

「雑ものを作やつてしていると、硝石を食つてしようがねえな。また少し土を採つて来て置こうか」

六月へはいったある晩だった。

七は、仕事小屋を閉めて出て行つた。——この前、気に食わない慎吾の顔を見て、ふいと止めて来た陣屋跡の古家——そこへ来

たのである。

頬冠ほおかむりをすると、すぐに、犬這いになつて、縁の下へ這いこんだ。いつかの時は、この不恰好なところを、慎吾に見られるのがいやで、引つ返したのかも知れない。

土台柱は、みんな白蟻が蝕くつたように腐つていた。建つてから一世紀以上は経っている——じわじわした陰鬱いんうつな闇が顔をつつむ。

その土台柱をかぞえて、何本目かを撫なで廻すと、小さい土搔つちかきと、籠があつた。彼はその土搔の刃で、土の上かわを三寸ぐらいずつ削ぐように搔いて、籠へ土を盛りこんだ。

「七の火薬はべつだぜ」

と、仲間の者も、常に彼の出す強力な火勢には驚いていたが、その硝石の宝庫は、この古家の床下だった。無論その土は、彼の手で加工され洗滌されてから全くべつなものに変質されるのであるけれど。

一かごとると、べつとりと汗をかいた。肱^{ひじ}を曲げて汗をこすると、土と蜘蛛^{くも}の巣が顔にこびりつく。

「おや？」

ここへは、何度も土を採りに来たが、今までにない現象をそこで見た。——すぐうしろの土台柱に、床板の割れめから、ほんの微かではあるが、明りが射している。

花火の妖精さえ信じている七だった。ぞつと寒いものを背すじ

に這わせて、蒸暑い体を冷たい土に寝せていると、ホホホと女が笑う、男が笑う、そして低くなり高くなり、淫みだらな声がかてんめんと耳をこそぐつて来る。

「? ……」

七の眼は闇の中に、梟ふくろのようになっていた。

「人間じゃない、人間の笑い声じゃない。……貉むじなかな？」

いや！ 彼はもつと慄りっぜん然とする想像にたどりついた。自分が墓をあばいたお千代後家の幽魂というものを。

あの淫いんとう蕩な後家によく似ている笑いかただ。死ぬ半月前まで、幾人もの村の男を、交かわる交る招き入れていたお千代後家の幽魂。

冷たい汗がすだれのように七の顔にながれた。あの世から洩れ

る火のように、かすかな光はまだそこに洩れていたが、いつか床の上の気配はしいんと死んだように静かになっていた。

前よりは遙かに小さなささやきがもれて来た。七は耳へ指を突っこんだ。そのくせ、そこを動くことは全く忘れて。

ざらざらと煤が襟元へこぼれたので、思わず耳の栓をぬくと、サアーツと突然に雨の音が外を走り通った。ひよいと見ると、白い霧が、床下の奥まで濛々とはいつて来る。

雷が鳴った。

轟々と翔けている！

青い電光が大地の顔を見せた。

七は、どやされたように醒めて、転がるように、床下から這い

出した。すだれのように雨垂れが打っている。真つ白な夕立だ。

土は持つて帰れない。いや、そんなことは忘れてしまっている！
彼は尻をからげて、雨のすだれの裏を潜くぐつた。

裏のほうへ廻ると、水口の雨戸が五寸ほど隙すいていた。ひよいと見ると、その下に、履物はきものが二足ならんでいる。蛇の目が一本、その上に渡してあつた。

「有難え」

なんの気もなく、手に取つて、ぱきんとひらいて身を隠した。

ザザザツと竹樋たけといの水が、傘に落ちて、滝のように水玉の変化を見せる。

ひらめく電いなずまに、高社たかやしろの山の肩がありありと二度ほど見えた。

七はしばらく雲を見つめて、雨の小やみを待っていた。

やっと、雨の縞がすこし細くなつたので、すつぽりと傘をかついで、池のようになつた水の中に飛び出した。——すると、うるの戸がガラリと開いた。

「おい、待て」

男の声である。すぐその後ろについて女の声があった。

「いけませんよ、その傘をさして行つちやあ」

声に覚えがあつた。七の足は忿怒ふんぬにふるえていた。さしている傘の耳を片手に抑えて、ばりばりツと引つ裂くように振り向けると、凄いほどおおざめた顔を、紺の円形の中から、グイと突きむけて雨戸の間に頬と頬を寄せ合つていた男女ふたりへいった。

「おぼえていろよ！ 傘か、てめえ達や濡れて帰れ！」

十三

姥うば捨すてと冠かんむりヶ岳たけを右のほうに見ながら善光寺平だいらを千曲川に沿つて、二里ばかり上かみへ遡のぼると、山と山の間、すべてひろい河原地へ出る。

しいんとした薄暮のいろが低く水面に降りていた。西岸の山の尾根から河原のふちへかけて、屋根へ石を載せた豆板のような家がまばらに散在して見える。

戸倉の温泉ゆだった。やがてその辺に、チラチラと数えられるほ

どの燈火ともしびがつく。

「支度がよかつたら、ぼつぼつ出かけようじゃないか。もう七之助のほうも、打揚場うちあげばに行つてゐる時刻だろう」

戸倉の温泉ゆの一軒。昼間からここに屯たむろをしていた松代藩の者があつた。そのうちの四名は慎吾についてゐる藩士だったが、あとの多くの若侍は、何かの場合の備えというつもりで、慎吾が糾きゆう合ごうしたものらしい。

「蜂屋氏はちやうじ、うまくやれよ」

「溜飲をさげて、後で飲むのを楽しみにしているぞ」

慎吾と、介添の四人を送り出して、彼らはその影が遠のくまで、二階から声援を送つた。慎吾はふり顧つて、腕を叩いてみせたり

した。なかなか元気である。果し合いの勝負以外に、何か成算があるらしかった。

戸倉の暗い辻をではず出端れると、汚い商人宿の軒下に、旅姿の女ひとり、きやはん脚絆てつこう手甲をかけた年配の煙火師が二人、首を長くして待っていたが、一行を見ると、

「慎吾様」

と、女が先に走り寄った。

「お芳どの、心配するな」

顔を見ると、すぐに慰めて――

「筒や玉は？」と、煙火師のほうへ向ってたずねた。この二人は、果し合いの条約にもゆるされて八寸玉の製作を手つだった男たち

である。

「もう先へ送っておきました。場所は決めた通り、こうがいわたし笄の渡舟から二町ばかりてまえのほうで」

「ご苦労だった。七のほうは、来ているか」

「あいつは河原ではやを釣っていましたぜ、待ちくたびれているんでしよう」

「ふーむ」と冷笑をゆがめて、

「じやお芳どの、そなたは近くまで行ったら、舟にのって川の中の丘にやすんでいるがいい。なに一人じゃない、丘のほうには拙者の友人を廻してあるのだ」

河原を辿たどって、上へ、五、六町も行くうちに、空はとつぷりと

夜になった。わりあい足元の明るいのは、水面から十尺ばかりぼうと青く見える水明りの加減であろう。

初夏ならばこの辺、佐久地方の高原から流れて繁殖した月見草の黄色さで夜も明るい。今秋草は川洲のどこにも伸びていた。

ピピピ、ピピピ、と河鹿かしかの啼く闇がなんとなく気をひき締める。

——と小舟が待っていた。慎吾は何かささやいてお芳だけをそれにのせて、ひろい河心の丘へ送ってしまった。

半町ばかり先に、螢ほたるほどの赤い火が見えだした。七は、煙草をすいながら戸狩の若者七人ばかりと一緒に、草叢くさむらに腰をすえこんでいた。

いるな。

来たな！

両方の感覚が無言のうちに冴える。

慎吾は、硬こわばった態度をとりながら、一同といっしよに歩みよつて、

「七、たいそう早かったな」

「おいでなさいまし」

七は柔和にあいさつをした。そして介添の者にまで、

「今日は、ご苦労様でござんす」と、いつになく慇懃いんぎんだった。

「そっちの支度はできておるのか」

「へえ。いつでも」

「ウム、そこが打揚場うちあげばか。幕のかわりに素縄すなわを張ったな」

「死縄のつもりでございますよ」

「なあに、勝敗は時の運だ。半分は天意に任せたつもりでなけりやあ」

「そうかも知れません」

「お互いに、恨みは残すまいぞ」

「あつしや、負けれや恨みを残しますね。残さずにやられねえ性分ですから」

「はははは」

と、笑ったが、両方とも空虚うつろだった。そして、さつきから互いにいわせようとしていることが、どつちの口からも出なかつた。

で、遂に七がいった。

「ところで、お芳は」

「む、お芳か」

「おまえさんのほうで、今夜ここへ連れて来るといふことになつていたはずですが」

「連れて来てはおるが、実は、打揚場に女は不浄ふじょうと考えて怪我でもしちやあならんから、戸倉の宿に残して来た」

「そうですか」

七は、案外素直にうけいれて、

「ようがす。異存はありません。——じゃ打揚場にわかれましたよ」
きりつといつて七が腰を立てると慎吾は反対に、どつかりと石に腰をすえて、

「ま、あわてるな、拙者は武士だから果し合いの作法もある。戸倉で調べて来た土器かわらけがここにあるから、お互いに、千曲川の水でも酌み合つて、ゆつくりと腹をすえてかかろうではないか」と、七の出鼻を折つた。

しかし、その態度のわりあいには、慎吾のひとみは、四方の闇に對して、決して、決して、落着きのあるひとみではなかつた。

十四

これが、ほんとの一国對一国の煙火陣ならば、鯨幕くじらまくをひき、押太鼓、陣羽織、あだかも戦場の對陣のような空氣が立つところ

であるが、今夜は、藩の次席家老のせがれと一煙火師との果し合
いだから、暗夜の大河に人影はほんの僅か、せきばく寂寞として、用意
の足音もいと静かである。

そのかわりに、もし敗れたら恋も生命いのちもない。必死なところだ。
しめつぽい川辺の夜風も、山と山に狭ばめられた初秋の空も、蕭し
ようざつ殺ころとした墨いろの中に鬼気をもつて、なんともいい難いせいそ悽
愴うという感は、むしろ今夜のほうがつよい。

雑草の離々りりとしている河原地を、水際離れて、およそ双方の間、
約五間ほどの距離をとつて立ち別れた。

筒埋つっいけはすでにできている。八寸玉もそのわきにすわった。

立会役に代つた藩士のひとりすすきが、芒すすきの葉を二本ちぎつてくじ籤にし

て二人に引かせた。短いほうが先揚さきあげ、長い方が殿しんがり。——七が先に当った。

「いざ！」

と、五間先の闇から、慎吾の緊張した声がうながした。

七は、短い脇差をさし、素わらじに紺きんの脚絆きゃはんだった。藍あいみじんの袖かたを革かわだすきに締めこんで、筒の前に膝を折った。

自分の生命をあずけるように、そろりと玉を仕込む。後ろへ退がって火縄を持った。

——口火落しの大事なことはいうまでもない。技といおうかこつといおうか、ぽんと筒へ火を落とすとたんの呼吸ひとつで、満天にひらく名花もだいなしに崩れることがある。また黒玉といって、

まったく殻をやぶらずに、そのまま、落ちてしまう例もある。黒玉を打ちあげたらば煙火師は土地にいられなかつた。それほど絶大な恥辱としていた。

さて！

七は、呼吸をはかつて、火を筒に落した。

そして、サツと身を退いた。——おどろくべき迅さで。

しゅツと、手もとの黄煙を突いて、細い火光がまっすぐに宙へ翔かけ上がった。

同時に、退ひいた膝ひざ形がたのまま、ひとみもそれを追って空に走っている。

どうだ！

——^{にら}睨むように宙天を見つめて、彼は、息の音をとめていた。

だが、どうしたんだろう？ 瞬時、また瞬時、宙へあがった八寸

玉は、雲の中へでもはいつてしまったようにいつまで何の光もない。

どかア——ん。

莫迦^{ばか}みたいな音が、真つ暗な空の奥にひびいた。

「黒玉だツ」

誰かの口から、こう絶叫すると、啞然としていた一同が余りのことに、舌をもつれさせて、

「ど、どうしたんだ七！」

「くろ、くろ、黒玉だぞ七！」

泣くように吃どもつて、地だんだを踏んだ。

七は、白い顔をして、筒のそばに腕組をして立っていた。

「静かにしろ、まだ勝負はつきやあしねえ」

「だ、だって、兄き」

「ええ、うるせえな。——おいッどうした！ そっち組は」と、
やけのように呶鳴った。

相手の案外な失敗に、じつと鳴りをしずめていた慎吾たちの組
は、七のやけな声を聞くと、いちどに侮蔑ぶべつをこめた笑いを爆発さ
せて、

「何と申したのか、もういちどいえ」

「こっちはすんだぞ」

「ううむ、美事みごとだった」

「なぜすぐに打揚げねえのだ。ことによつたら、てめえのほうも、黒玉かも知れねえぞ」

「ばかを申せ。いま慎吾の腕を見せてやるから胆きもを潰つぶすな」

「才オ」

七は、闇に眼を澄ました。

そして、慎吾が、野袴のばかまのすそをからげて、筒へ口火を落した

瞬間に、七の唇が不意に、

「しまった！」

と声を飛ばした。

慎吾はハツと思つたらしい。咄嗟とつさに退ひくべきからだを反対に、

思わずひよいと首をつき出して、その筒ぐちを覗いたのである。

異様な音響がした。

火と、血と、筒の裂けるような音！

とたんに、慎吾の首は、形を失つて、宙天へ飛んでしまった。

胸のひろがるような爆音が、同時に、初秋の夜空をいっぱいにどかアんと鳴った。五ツの銀光星が北斗のように斜めに浮游することしばらく、やがて、その五ツの星が個々にばらばらと炸裂すると、あざやかな光傘をサツと重ねて、冠、鏡、台、姥捨の山々を真つ青に浮かせて見せたかと思うと、その一つの星の色が、臙脂えんじから出た人魂のように、ぽかあ、と瞬間——ほんの瞬間、真つ赤な光を千曲川の水面に映した。

——夢だ！ 夢みるような気もちなのだ。

誰もなんにもいうものがない。

上を向いたまま。

腕をくんだまま……。

なんとすばらしい火の美だろう、恐い魔術だろう、瞬間の光焰の中には見上げたものの魂がみんな燃えてしまった。

ことに彼等は、かつて見ない真の赤光に眼を射られて、茫然とわれを忘れていたが、疲れた網膜を、ふと足もとにやすめた時、ほとんどすべての者が同時に、

「大変だツ！」

と、われに返った。

慎吾の胴には、首がなかった。

——七はもうそこにいなかった。

十五

千曲川の暗い水面を、七は白い波影をあげて泳いでいた。

彼の向って行く丘に、夕方から潜んでいた人影のあるのを見て、
こん夜の果し合いには、何か慎吾が卑劣な策をとるものと予期して
いた。そして、なすがままにさせて眺めていたのである。案の
定、彼は暗闇まぎれに、自己の製作を七のものとすり替えた。

「さ。お芳の番だ」

七の眼は、蛇じやのように水から丘を見つつ拔手を切った。しかし、彼の影が丘へ近づくと、そこから一艘の小舟が急流に乗って下流しもへ離れた。

七もすぐ激流へからだをまかせた。舟はやがて、浅瀬の砂利に底を噛まれて、棹さおがきかなくなつた。七はぬつと半身をあげて、じやぶじやぶと歩き出した。

——あつ。

七が声をあげた時、舟の中から女の影が水へ躍つた。白い泡が絞り染のように浮いた。七はまた必死に泳いだ。

「死ぬぜ、死ぬぜ、おれの自由になつていねえと」

やがて、七は藻もぐさのようなものを手にからみつけて、遥はるか下流しもの

岸へ泳ぎついていた。泣く力もない白い腕が、彼の足に巻きついたり、たまま水際をぐんにやりと離れた。

× × ×

粹な町、善光寺の権堂へは七の馴染が多かった。巽たつみや屋という茶屋の二階に、彼の顔が頬杖をついていた。

千曲川のことがあつてから三日目の宵である。

「きようは星祭りだなあ、お芳」

うしろを向くと、部屋の隅に、行あんどん燈の灯にさえ顔を上げ得ないで、ほつれ髪の影響が、胸へ手をさし入れて、しよんぼりと俯向いている。

「なあ、お芳。——祭りだぜ、秋の銀河祭りだ。そうそう、去年

の今ごろは、てめえとよく会っていたなあ、
銀河あまのがわの下に寝て、

ふたりとも風邪かぜをひいたこともある」

「……すみません。ほ、ほんとうに、すみませんです」

「何をよ、よせやい」

「か、かんにんして……」

「おら、怒つてやしねえつてことよ」

「そういわれるのが、苦しいんです、斬られるよりも、つらいんです、い、いっそ千曲川で私やあ……」

お芳は、大きな声で泣き伏した。

「死んじやつまるめえ。おめえみたいなたちの女は、まだまだ沢山男に縁があるぜ。これから毎年、どんな銀河まつりの晩を送る

か、わからないことさ」

「殺して下さい。こんな……こんな苛めかたいじをするよりも」

「おら、口癖にいうが、煙火師だぜ、どうせろくな根性じゃねえ。こじれているうちやしもうがねえんだ。けれどその代りにや、さっぱりする時は竹を割ったようなもんさ」

「後生でございます、手を合せますから。……七之助さん。わ、忘れて」

「だからよ、おれの、このむやむやの晴れるまで待ちねえつてことよ。な。おれはおめえに拝まれて往生するほど善い人間に出来ていねえ不しあわせ者だ」

「……………」

「おう、おう、町や祭りだし、空は星だ。色紙を竹につけて子供がかつぎ廻つていらあ、いいなあ子供は……」

頼杖ほおづえを直して、往來をながめていたが、何を見たか、ぎくつと、お芳のそばまで身を退ひいた。

「おい、支度をしろ」

裾をからげると、脛すねには脚絆きやはんが当つていた。煙草入れ、紙入れ、あわただしく身につけて押入をがらりと開けて、重い包みに手をかけた。

が、考えて、

「駄目だ、こいつを金にしてからと思つたが、持つちや歩けねえ」
あきらめたようにつぶやいて、びっくりしているお芳の腕をか

かえ込んだ。

ふすま

襖を開けて、裏梯子うらぼしごまで出て来ると、階下したからどかどかどかどか

け上つて来た松代藩の武士が、途中で、真黒にかたまつて、

「あつ、七！」

と、立ちすくんだ。

「あぶねえぜ、おれの体は、どこを触つても火薬玉が飛ぶんだから」

すうつと、表へ来てみたが、その階下したも人間でいっぱいらしい。

物干し台へ出て、お芳の手をしつかと持ったまま、屋根へ移ろうとすると、星祭りの笹たもとへ、お芳の袂たもとが触れて、そばの紅蠟燭べにろうそく

が火のついたまま部屋の中へ転がり落ちた。

自分を求める捕手の侍たちの怒号が、七の耳におかしく聞えた。善光寺の境内を走って、裏山の中腹に腰をおろした時である。彼は初めて、うしろの空が赤く染まっているのに気がついた。半鐘の音も鳴っている。

「あ……あの蠟燭だ。巽屋たつみやにや世話になったのに、悪いことをしてしまったな」

その時、火事の空の中で、耳の破れるような音響がした。

おやつ？

見ると、炎の巽屋たつみやの屋根から、ツツツと細い火の柱が無数に空へつきぬけた。凄まじい爆音は絶えまなく空に裂ける！ そ

して、ぱあと空いちめんが花火になった。流星、狂い獅子、七ツ傘、柳、五葉牡丹ぼたん、花ぐるま。

花火に重なる花火、爆音につづく爆音、滅茶滅茶な火の乱舞、光の狂射、色の躍り、善光寺の町はあらゆる色に変つて明滅した。空も地も気をそろえて気が狂ちがつたような瞬間が起つた。

七は、巽屋の押入に、残して来たものを思い出して、手を打つた。

「あははは。あははは。笑つちやすまねえが、笑わずにやいられねえ。捕手のやつあ、驚いたろうな。——だが今夜あ、すばらしい銀河まつりだぜ」

と、お芳をふり向いて、

「おい、戸狩へ帰んねえ。おらあ、これから目的^{あて}なしに高飛びだ。お父っさんによろしくな」

青空文庫情報

底本：「治郎吉格子 名作短編集（一）」吉川英治歴史時代文庫、
講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2003（平成15）年4月25日第8刷発行

初出：「サンデー毎日 秋季増刊号」

1930（昭和5）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河まつり

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>